

〈その他〉

学生の主体的な地域貢献活動「からだフシギプロジェクト」の実践報告

A Practical Report on the Student-led Community Contribution Activity “Our Amazing Bodies Project”

伊東真理 山本三希子 伊藤美千代

東京医療保健大学 千葉看護学部 看護学科

Mari ITO, Mikiko YAMAMOTO, Michiyo ITO

Division of Nursing, Chiba Faculty of Nursing, Tokyo Healthcare University

要 旨：目的：NPO からだフシギでは、子どもがからだを学ぶプログラムの「おはなし会」を実演する「からだ先生」の育成に取り組んでいる。千葉看護学部地域看護学領域では、東京医療保健大学ビジョンの具現化に向けて、学生が地域活動へ関心を持ち、自身も地域の一員であることを自覚しながら、主体的に地域貢献活動の実践を学ぶことを目的に、「からだフシギプロジェクト」を立ち上げ、「からだ先生」の研修を受けた学生が主体となった「おはなし会」を実演した。今回、その実践を振り返り、成果と課題を報告する。方法：活動に賛同する学生を中心に「おはなし会」の内容を検討し実践した。結果と考察：延べ64名の参加があり、子どもや学生から「楽しかった」という感想があった。学生が主体的に地域貢献を目的とした活動を実践できたことは、本学のアクションプランの実現に向けた行動目標「学生が主体的に地域貢献活動に取り組む空気感の醸成」に一部寄与できたものと考えられる。

Abstract：Aim: The nonprofit organization, Karada Fushigi (Amazing Bodies) is engaged in creating “Our Amazing Bodies” teachers who hold informal talks that teach children about the body. The students at Chiba Faculty of Nursing, Department of Community Nursing are mindful of being members of the community and interested in community activities with an eye toward realizing Tokyo Healthcare University’s vision, launched the “Our Amazing Bodies Project”. Students who underwent the “Our Amazing Bodies” teacher training took the lead and presented the program’s talks to voluntarily learn about actual community contribution activities. This report looks back on the implementation of the program’s talks and issues.
Method: The contents of the talks were reviewed and carried out with students who are proponents of community activities.
Results & Discussion: A total of 64 Children in the area and their parents participated. Both the children and students felt the program was “fun.” The fact that the students successfully implemented an activity with the aim of voluntarily contributing to the community can be viewed as having helped fulfill the fostering of an atmosphere in which students proactively undertake community contribution activities to achieve the university’s action plan.

キーワード：地域貢献活動、看護大学生、実践、地域住民

Keywords：Local contribution activities, Nursing college student, Practical, Local resident

I. はじめに

2006年の教育基本法改正によって、大学には新たに「学術の中心として、高い教養と専門的能力を培うとともに、深く真理を探究して新たな知見を創造し、これらの成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与する」といった基本的役割が規定された¹⁾。また文部科学省は、2040年に向けた高等教育のグランドデザインにおいて、「地域における高等教育のグランドデザインが議論される場が常時あり、各地域における高等教育が、地域のニーズに応えるという観点からも充実し、強みや特色を生かした連携や統合が行われていくこと」を今後実現すべき方向性として提示している²⁾。

東京医療保健大学ビジョンの実現に向けたアクションプランにおいては、「地域と連携・共生し、社会貢献」の柱が示され、千葉看護学部においても、ビジョンの具現化に向けた教育研究活動が数多く取り組まれている。こうした活動の1つとして、千葉看護学部地域看護学領域では、東京医療保健大学ビジョンの具現化に向けて、学生が地域活動へ関心を持ち、自身も地域の一員であることを自覚しながら、主体的に地域貢献活動の実際を学ぶことを目的に、NPOからだフシギが展開している「からだ先生」の研修を受けた学生が主体となって「おはなし会」を実演する「からだフシギプロジェクト」を立ち上げた。以下、その取り組みについて報告する。

II. 方法

1. 東京医療保健大学千葉看護学部地域看護学領域「からだフシギプロジェクト」の実際

NPOからだフシギとは、自分のからだについて知ることが、健康になるための基本として、5-6歳児の子どもがからだについて学ぶ環境づくりを進めている団体である³⁾。同団体は教材開発の他、子どもにからだのことを伝える「からだ先生」の育成を目的とした研修会を開催している⁴⁾。また同団体では、「からだせんせい」の活動として、基本教材を活用した「おはなし会」の開催を進めており、その方法のアレンジや工夫は自由とされている。同団体のホームページにおいても、「お話のやり方は自由です」と明記されている⁵⁾。

そこで学生の実践に向けた準備として、千葉看護学部在学する全学生に「からだフシギプロジェクト」の概要を説明した後、活動に関心のある学生を対象にプロジェクトの詳細を説明し参加を呼び掛ける説明会

を実施した。ついで、活動に賛同する学生（以下、学生）が、同団体が主催する研修を受講するための調整を行った。研修では、子どもがからだを学ぶことの意義について説明を受けた後、実演の場所や使用教材（絵本・紙芝居）、実演の進め方等の具体的な説明を受けた。参加人数は学生6名、教員1名であった。

2. 学生による「おはなし会」実践に向けた準備

「おはなし会」は、アクションプランの実現に向けた本学の行動目標である「学生が地域との協働・共生を学ぶ環境を支援する」、「教職員が地域貢献活動に関する情報収集・提供の仕組みを整える」等を念頭に置き、大学近隣に暮らす子どもを参加対象者として地域に広報することとした。配布したチラシの一部を図1に示す。

3. 「おはなし会」構成と内容の検討

「おはなし会」の内容は、研修での学びの他、他大学における取り組み事例⁶⁾ ⁷⁾を参考としながら、学生と教員にて複数回のミーティングを重ね、決定した。参加する子どもたちの集中力を考慮して「おはなし会」の所要時間は毎回40分程度とし、手遊びの選曲は「おやくそく」など、子ども達が最終的に手を膝に置き、説明を聞く姿勢が自然に取れる曲とした。また、新型コロナウイルス感染防止対策として、受付での手指消毒、マスク装着、間隔を開けた座椅子配置等の配慮を行った。「おはなし会」の流れを表1に示す。

「おはなし会」の内容は、導入としての手遊びの後、紙芝居とからだTシャツを用いた実演、まとめとして説明内容の復習を兼ねたクイズで構成した。また、クイズ終了後には、修了証の授与とメダルを渡した。手遊びは学生が2名ペアとなり、1名が紙芝居を読み進め、もう1名が消化器系を表したTシャツを用いて臓器の部位を適宜説明しながら実演した。まとめとして説明内容の復習を兼ねたクイズの実演として、からだのイラストを示した紙面を配布し、紙芝居で説明した臓器の該当部位にシールを貼付するように説明した。2022年度における実績は表2の通りである。また、実演時の実際の様子を写真1に示す。

III. 結果

1. 「おはなし会」の実演

第1回目は本学地域交流イベントの一企画として行い、第2回目は本学所在地エリアの児童館にて小学生を対象に行った。また、「おはなし会」の広報として、チラシ（図1）は「おはなし会」当日、実演する学生

表1 「おはなし会」の流れ

	時間割	「おはなし会」	概要
導入	5 分	手遊び (おやくそく など)	参加する子どもの関心を引き、楽しみながらも実践を観る姿勢を作れる実演
実演	20 分	紙芝居	からだTシャツと「NPO からだフシギ」が製作した紙芝居を実施
まとめ	15 分	クイズ・シール貼り	からだのイラストを示した紙面を配布し、参加者に紙芝居で説明した臓器の該当部位にシールを貼付するよう説明
		質問時間	参加者から質問に適宜、回答
		修了証と「からだ博士」メダルの授与	参加した子どもたち全員に、修了証と「からだ博士」メダルの授与

表2 「おはなし会」の実績

	開催日	開催 周知方法	開催場所	紙芝居テーマ	参加者数 (延べ)
1	2022/11/27	近隣保育園へのチラシ配布・電話かけ	東京医療保健大学 船橋キャンパス	①たべもののとおりみち（消化器） ②ちとしんぞう（循環器）	52 名
2	2023/3/24	船橋市 HP、児童館だより等を用いた周知	本学所在地エリアに位置する児童館	①たべもののとおりみち（消化器） ②ほねときんにく（運動器）	12 名



写真1 「おはなし会」実演時の様子（被撮影者の同意を得た上で掲載）

がグループに分かれ、説明しながらチラシを手渡した。その他、事前に近隣保育園にも配布した。

2. 参加者の概要

参加した子どもの年齢は2歳から小学高学年までであった。本学内にて開催された地域交流イベント企画として実演した第1回目は、全ての子どもに保護者が付き添っており、兄弟姉妹での参加も見られた。第2回目の児童館での実演では、幼児には保護者が付き添っており、小学生は学生の呼びかけを受け友人同士声を掛け合って参加していた様子があった。第1回目は延べ52名、第2回目は延べ12名、計64名の参加があった。

3. 参加者の反応

「おはなし会」終了後には、子どもたちからは「楽しかった」、「面白かった」、保護者からは「からだの仕組みについて、親子で話す良い機会になった」、「(子どもは)からだの仕組みについて元々関心を持っていたから、こうしたわかりやすい説明を聞いて今日はとても楽しかったと思う」等の感想が寄せられた。

4. 学生の反応・感想

「おはなし会」終了後のミーティングでは、実践した学生より、「やってよかった」、「楽しかった」等の

感想が聞かれた。その他、参加者である子どもの反応を振り返り、「その場で参加した子どもたちの素直な反応を聞けるのが楽しかった」、「参加した子どもたちが喜んでくれる様子が嬉しかった」等の感想も聞かれた。今後の活動については、「これからも続けていきたい」、「もっとメンバーが増えるといいと思う」といった活動継続を希望する声が寄せられた。

IV. 考察

1. 「からだフシギプロジェクト」の成果

アクションプランの実現に向けた行動目標である「学生が地域との協働・共生を学ぶ環境を支援する」には、さらに具体的計画として、「地域活動を行うことで得られる学びや教職員の支援について、ガイダンス時に学生に情報提供する」の他、「学生の同好会設置や活動を支援することで、本学全体で地域活動を奨励する空気感を醸成していく」等が提示されている。

今回、NPOからだフシギが主催する子どもがからだを学ぶための「おはなし会」を基軸とした本報告の「おはなし会」は、教員の支援を受けながらも、学生が主体となって計画し広報・実践を経験することができた。新型コロナウイルスにおける影響より、制限せざるを得なかった学生の課外活動を再開できたことは、学生の自主的かつ自律的な地域貢献活動の一助になっていたものと考えられる。また終了後に、活動継続を希望する声が聞かれていた様子から、「おはなし会」の実演を通して、地域貢献を目的とした活動を進めていく動機づけを高めることができていたと考えられる。これらの点より、本取り組みは本学のアクションプランの実現に向けた「学生が主体的に地域貢献活動に取り組む空気感の醸成」に一部寄与できたものと考えられる。

その他、「おはなし会」全体を通して、参加した子どもたちのほとんどが、呼びかけに身を乗り出して応答し、積極的に質問をしていた様子からも、「おはなし会」に参加することで、より主体的に自らのからだの仕組みや機能について関心を持つことができていたと推察できる。この点は、子どもたちが幼少期より、自らのからだに意識を向け正しく理解する一助になっていたものと考えられる。また、同席していた保護者の感想からも、「おはなし会」を通じて、保護者が子どもの興味や関心を再確認する機会にもなっていたことが考えられた。

2. 今後の課題

地域貢献が大学の基本的役割に位置付けられ、その

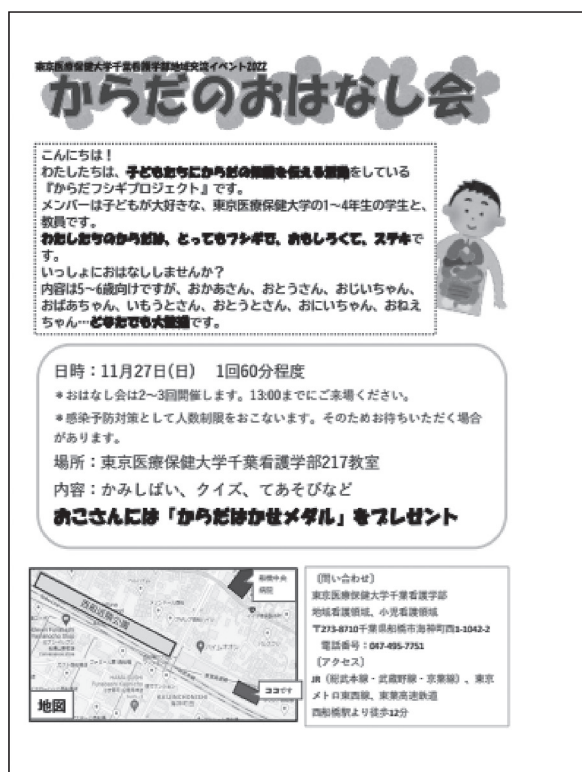


図1 「おはなし会」のチラシ

成果共有が社会から求められていることを鑑みると、今回の取り組みを第一歩とし、学生がより主体的に地域貢献活動を進めていける仕組みづくりが今後の課題といえる。

そこで2023年度、本プロジェクト参加学生を中心に、地域住民との触れ合いから健康に関する知識を深め、地域住民が健康に関心を持つことを目的とした同好会を設置することとなった。本取り組みの成果を基盤とした同好会活動を通じて、より学生が主体的に、地域に暮らす多様な世代を対象とした地域貢献活動に取り組んでいけるよう、引き続き支援を進めていきたいと考える。

V. 結論

千葉看護学部地域看護学領域では、学生が主体的に地域貢献活動の実際を学ぶことを目的に、「からだフシギプロジェクト」を立ち上げた。プロジェクトでは、研修を受けた学生が主体となった「おはなし会」を実演した。結果、延べ64名の参加があり、参加した子どもたちからは、「楽しかった」、「面白かった」、保護者からは「からだの仕組みについて、親子で話す良い機会になった」、実践した学生より「やってよかった」等の感想が寄せられた。今後は本取り組みの成果を基盤とした同好会活動等を支援し、学生が主体的に地域貢献活動を進めていける仕組みづくりを進めることが課題である。

謝辞

本取り組みは、東京医療保健大学令和4年度学長裁量経費の助成を受けて実演した。関係各位に心より感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 文部科学省.教育基本法.2006 (2023.5.5 アクセス)
https://www.mext.go.jp/b_menu/kihon/about/mext_00003.html
- 2) 文部科学省.令和3年度 文部科学白書 (2023.5.5 アクセス)
https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab202001/1420041_00010.htm
- 3) NPOからだフシギのホームページ (2023.5.5 アクセス)
<https://karada-kenkyu.jimdofree.com/>
- 4) 瀬戸山陽子.【児童・生徒への医療健康情報サービス】子どもが自分のからだを学ぶ意義 子どもにからだのことを伝えるNPO活動について.医学図書館2019; 66 (1): 23-27.
- 5) 前掲3) (2023.12.14 アクセス)
- 6) 中村めぐみ, 高橋恵子, 大久保暢子, 大田えりか, 山路野百合. 大学が地域に開く子どもへの「からだのおはなし会」実践報告. 聖路加国際大学紀要2022; 8: 52-57.
- 7) 瀬戸山陽子. さまざまな場所に求められるPeople-Centered Nursing Care 5～6歳児にからだを教える「からだフシギ」プロジェクトのこれまでとこれから. 聖路加看護学会誌2018; 21 (1-2): 68-70.